

rififi

53



目 次

連載第 4 回 眼鏡越しの空	- 1 -	しもこし
テーマ競作『凍る』		
魔十楼	- 11 -	霜越邦彦
過去の明日	- 13 -	橋本さかえ
眠れる惑星の美女	- 15 -	白坂 匡
凍った月	- 17 -	吉村千夜
フユのかけら	- 19 -	砂塔悠希
連載第 2 回 幻想詩人	- 21 -	橋本さかえ
連載第 1 回 あした、桜の下で	- 29 -	吉村千夜
編集後記	- 39 -	

眼鏡越しの空

しゅーしゅ

木原智美：主人公。高校二年生。眼鏡をかけた女の子。
大石光輔：主人公の同級生。バスケット部。
木原利通：智美に干渉したがる、できのよい弟。
田端：主人公の学校の写真部部长。
倉下桃子：主人公の同級生。友達。

前号、あらずし
大石光輔がインターハイ出場をかけた試合で、彼の活躍のもと勝利した。智美は彼のことをかっこいいな、と思う反面、なぜか素直によるこべない。試合終了後、倉下が、大石に「智美が好きだって」というと、大石は「ぼくも」と答えた。智美は呆気にとられる。

夢を見ていた。その夢で、智美はカメラマンをしていた。おそらく、スポーツ紙かフリーのカメラマンというところだろう。そこは、国立の体育館のようだった。智美は一眼レフのカメラを首にかけ、颯爽と体育館を駆け回り写真を撮っていた。

撮っているのは、バスケの試合の写真だ。そこで試合をしているのは大石光輔である。プロ・リーグの試合という設定らしい。どうやら、これに勝ったら「優勝」という試合のようだった。場内はかなり盛り上がっていた。得点は、1点差で大石のチームが負けており、残り時間もほとんど残っていなかった。

大石はボールを持ち、相手チームの背の高い黒人四人にマークされていた。離れたところに味方の四人がいたが、敵一人に押さえられており、あてにはならなかった。

智美が、頼りにならない味方だ、と思うと、次の瞬間から、その味方四人全員の顔が、ボンツという音とともに「タコ」と書かれた顔に変わってしまった。もう、試合終了、というとき、大石は隙をついてドリブルでマークを突破した。その瞬間から相手チーム選手の顔もボンツと全て「タコ」になってしまった。大石は、バスケツトゴールより大分離れたところからジャンプする。それにも拘わらず、大石の体は充分とゴールに届いた。思い切りボールをゴールへとたたき込む。

それと同時に終了のホイッスルが鳴った。
大石のチームの優勝だ。

智美は、しっかりとその瞬間をカメラに収めていた。

智美はコートに近付く。コートの中では大石が胸上げされており、智美は、それも間近でカメラに収めた。

胸上げが終わった後、大石は智美に気付いて、近寄って来た。そして、智美の名前を呼びながら智美を抱き締めた。どこか遠くでアナウンサーらしき人の声がしている。耳を澄ましてそれを聞いてみると、その内容は大石と智美についてだった。二人のことを視聴者に解説しているのだ。大石については、その年の最優秀選手賞を受賞したと報じている。智美のことは、大石の婚約者で、プロのカメラマンだと言っている。さらに、最近ピュリツァー賞を受賞している、とも付け加えていた。

智美は幸せを感じていた。大石の活躍や大石と婚約しているという(設定である)ことに。また、それだけでなく、自分の活躍にも満足していた。

色々なことに充実を感じている。

智美は、いつの間にかポロポロとたくさん涙を流していた。もちろん「幸せ涙」であるのだが、それにしても異常な程の涙の量だった。

(ちょっと、いくらなんでも流れ過ぎよ。何で止まらないの。これじゃ、まるで滝じゃない)

そして、その涙が本当に滝になってしまったところで

目が覚めた。

目が覚めてみると、目の周りが涙で濡れていた。どうやら本当に泣いていたらしい。辺りを見回してみると、そこはいつもの自分の部屋だった。

夢を思いおこしてみる。大石の活躍は見事なものだったと感心したが、その他のことを思い出して恥ずかしくなった。自分が、

プロのカメラマン。

大石の婚約者。

ピュリツァー賞の受賞者。

だという。智美は我ながら本当にずうずうしい夢だと思った。機械音痴で、ろくにまともな写真も撮れないのにプロのカメラマンだなんて。ピュリツァー賞を受賞しただなんて。

(ところで・・・どんな人が受賞する賞だったっけ)

知りもしないくせに、受賞だなんて、いい加減にもほどがある。大石は将来そのくらいの人になりそうなのでよいが、自分の方は現実とんでもない差がある。随分と不釣り合いな婚約者だ。智美は冴えない本当の自分を思うと、泣けて仕方なかった。

時計は、まだだいぶ早い時刻を指していたが、もうじきアラームが鳴るところだった。智美は眼鏡をかけて起き上がり、顔を洗いにいく。

智美が早い時間に起きたのには理由があった。今日は、バスケの試合があつた日から、二週間程過ぎた日曜日である。実は、今日、智美は大石と出掛ける予定なのである。そうなつたいきさつは、バスケの試合後にあつたことを説明する必要がある。

試合はまだ終わつたばかり。智美が体育館の一階に降りると、そこで智美のことを待っている大石がいた。まだユニフォーム姿だ。

「あの大石君、さっきの『ぼくも』ってどういう」

「そのまんまさ、そういうことなんだ。・・・実は最初から考えていたんだ、今日、インターハイ出場が決まったら、言おうつて。・・・木原さんのこと、好きなんだ。ぼくと付き合ってくれないか」

智美は自分の耳を疑った。それは夢ではなかった。あのカッコ良くて色々と人気者である大石が、智美に告白しているのである。智美の基準で考えれば、逆こそあれ、大石からなどはとても考えられなかった。

「そ、それって、ほ、ほんきな」

「え、そうだけど、何か、変だつたかな」

智美は思い切り首を横に振った。

「ぼくのこと、嫌い」語尾が上がる。質問だ。

智美は再び思い切り首を横に振った。

「付き合いたくない理由がある、とか」

智美は三たび思い切り首を横に振った。

「だめ、かな」

智美は四たび思い切り首を横に振った。しかし、振つてから何に對して振つたのかに気付いた。

(あ、・・・はずみで・・・)

しかし、既に遅かった。大石は、ありがとう、と言つ

て智美の手を取っていた。

「やつつたーっ」と言つて大喜びしている。

気が付いたときには、もう手の付けようがなかった。

「え、あの、ちよつと」

と言っている智美に気付かず、

「じゃ、表彰あるからちよつと待ってて」

と言つて行つてしまった。

智美は自分に尋ねてみる。

(「嫌」かな)と。しかし、(そんなことはないんだよ

なあ。むしろその逆だよなあ)。いくら考えても断る理由など、どこにも見当たらなかった。

智美が顔を洗っていると、弟の利通が歩いてきた。パジャマがわりのＴシャツ、ショートパンツ姿で、眠そうに目をこすっている。トイレに起きたようだ。利通は智美に気付けて声をかけてきた。

「あれ、もう起きたの。早過ぎるんじゃないの。出かけるまでに、まだ、二時間あるよ」

「あ、うん、お弁当作るから」

「え、姉ちゃんが・・・」

「ちゃんと、トシの分も作るよ」

「・・・大丈夫なの」

「失礼ね。味のことなら心配しないの」

「味じゃないよ、・・・天気」

「トシ、あんた喧嘩売ってるの」

「う、姉ちゃん、・・・怖すぎ」

利通はよつをたすと自分の部屋へ戻って行った。もう一眠りするのだろう。実は、今日は大石と二人きりではない。利通も一緒なのである。

試合のあった土曜日のおと、明けて月曜日。その日の放課後までには、大石を知る者の間で、大石にカノジョができた、という噂が広まっていた。

大石は、きつと、今年のインターハイで活躍し、校内でも、校外のバスケットファンの間でもスーパースターになるのではないだろうか。今でも「校内では有名」であるが、一人残らず知っている、というわけでもない。しかし、いずれ、バスケットファンや大石ファンでなくても、彼を知るようになるだろう。智美は、今だったから、それほど大騒ぎにはならなかった、と胸を撫で下ろした。しかし、それでもクラスの中では、しばらく冷やかしが続いたということは言うまでもない。

利通も月曜日にはそれを耳にしていた。クラスメイトにバスケット部員がいて、

「『木原・・・』っていうらしいぜ。・・・お前、一コ上の姉ちゃんいたよな。お前の姉ちゃんじゃないの」

それで、知ったらしい。その日の夜は大変だった。利通は不満気に智美に色々質問してきた。利通は何かと智美に干渉したがる。どうも土曜の夜から日曜を挟んだ月曜の朝まで、智美の口からその事実を教えてもらえなかったことに不満があるようだった。しかし、智美にし

てみると、利通の干渉はただ煩わしいだけなので、そういうことを自分から利通に言うようなことはしない。それが智美にとつての当然だった。

それから数日後の昼休み、校内で大石と利通が立話しているのを見掛けた。智美はもちろん驚いた。後で利通にいきさつを訊くと、最初は、食堂で会ったのだという。利通は同じクラスのバスケット部員と一緒にいたため、智美の弟だと紹介されたのだという。智美は何か余計な事を言つてたりはしないかと気がきでない。

「で、何を話したの」

「気になんの」

「あたり前でしょ．．．で、何を話したの」

「．．．教えない」

「な、何でよう」

「だって、いつも話しかける俺を邪険にしてるじゃん。

こんなときだけ都合が良すぎ」

(う．．．仕返しのもりか)

「わかった、わかった。今度からちゃんと聞くから．．．で、何を話したの」

「．．．ちよつと疑わしいけど、まあ、いいや．．．

釣りの話をしてたんだよ」

『釣り』

「そう」

利通は釣り好きである。自分の棹やら色々道具を持つている。智美は大石が持っていた雑誌を思い出した。

(そう言えば、釣り雑誌を見てた時もあったな)

智美は釣りには全く興味が無い。どこが面白いのか、さっぱりわからない。しかし、大石が釣りに興味あるのかと思うと、釣りが格好いいことのように思えてきた。

「大石先輩が釣りやるの知らなかったの」

「そんなことないよ」

しかし、直接本人からは、まだ聞いたことがない。大石はバスケットの練習で帰りが遅いし、冷やかされるのが嫌で教室でもほとんど話していないのだ。休みの日も、試合のあった次の日の日曜日にちよつと会つて話したくらいだ。バスケット部は、よく日曜日にも練習しているので、まだ二人で出かけたこともなければ、色々、趣味などの話もろくにしていない。

(うーん、付合つてるといふ実感が無いなあ)

「で、話が弾んじゃつてさ、次の日曜は練習ないつていうんで、行くことになったから．．．釣り．．．大石先輩と、ブラックバスを釣りに」

智美は目が点になった。

「・・・は、釣りに行ってくつて、何でトシと大石君が二人で出かけるわけ・・・わたしだってまだ二人で出かけたことないのに」

そこで、利通は少し言いくそうに言った。

「だからさあ、二人じゃないわけよ」

「ん、どういうこと」

「・・・つまり」

『「つまり」』

「・・・姉ちゃんも一緒なの」

智美は驚いた。

「ええっ、ちよつと勝手な。何でわたしが釣りに」

「じゃ、俺と大石先輩の二人で行くよ」

「それは、だめ」

「じゃ、一緒に行こう」

「何で初デートに、あんたが一緒なの」

「じゃ、姉ちゃん、来なくていい」

「それは、だめ」

「じゃ、一緒に行こう」

「何でわたしが釣りに」

「じゃ、俺と大石先輩の二人で行くよ」

「それは、だめ」

「じゃ、一緒に行こう」

「うー、これじゃ、埒あかん」智美は大きく溜め息をついた。「わかった。行く。行けばいいんでしょ・・・それにしても、何かが違ってるような気がするなあ・・・うーん、どこだろう。何か、はめられた気がするんだけど、気のせいかなあ」

「まあ、気にしない、気にしない」

合点がいかないが、とりあえず納得することにした。

「・・・で、海行くの」

「んなわけない。ブラックバスは淡水魚」

「じゃ、川へ行くの」

「それも違う」

「・・・何で違うの。釣り堀なの。まさか、水族館とか魚屋って言うんじゃないよね」

「んなわけねえ・・・湖・・・み、ず、う、み」

それを聞いて、智美はキョトンとした。魚がいる場所として「湖」だけすっかり忘れていたのだ。

「・・・あ、そうか」

智美は作ったお弁当をバッグに入れ、それを肩にかけ

た。デジカメは置いて行こうか悩んだが、持って行くことにした。悩んだ理由は、写真部の部長、田端にある。試合があつた日、田端は智美が撮つた写真を、あとで見せてほしい、と言つていた。智美は、自分の撮つた物が感想を貰えるほどの代物とは思えなかつたので、しばらく放つて置いたのだが、大石が「ものは試し」というので、見てもらうことにしたのだつた。

写真を選び、利通に手伝ってもらいながらそれらをフロッピーに入れた。

写真部は専用の部室を持っていなかった。顧問の先生が理科の先生なので、理科室と理科準備室を部室がわりにしていた。智美は放課後、恐る恐る理科準備室の扉を開けた。中には、一眼レフカメラの手入れをしている上級生らしき女子がいた。彼女は、智美に気付いた。

「あ、何か、用」

ぶつきらばうな言い方だつた。智美は少しひるむ。

「はい、田端先輩、いらっしやいますか」

すると、彼女は、

「ふうん」そう言い、ニッコリ笑つてから隣の理科室を指差した。「田端は、隣の部屋。今、呼ぶね」

そんなに悪い人ではないようだ。

間もなく田端はやつてきて、智美を見ると軽く手をあげて見せた。相変わらず頭はボサツとしている。

「タバツチ」さっきの女子が田端に向かつて言つた。

田端はそういうあだならしい。「いつのまに女の子の友達作つたの」その言葉は、少し毒気を含んでいた。

「あ、いや、そういうわけじゃない」

彼女は今度は智美に向かつて言う。

「あたしは、三神。三年で副部長。よろしく」

「は、・・・はあ。わたしは、一年の木原です」

「田端は浮気症だから、惚れちゃだめだよ」

「おいおい、みっちゃんが言うとシャレにならんからやめてくれ」と田端。

智美はフロッピーを取り出すと、先日のバスケの写真であることを田端に伝えた。田端は理科室の方にいる一年の男子生徒を呼び、その彼に準備室に置いてあるパソコンを使わせ、智美の写真を読み出させた。

田端は、一枚一枚丁寧に見ていく。

最後の一枚は特に念入りに見ていた。それは、大石が、最後に決めた3ポイントシュートの写真だつた。写した角度が良かったせいか、大石が決めたのが、よくわかる

ようになっていた。

「これ、いいね。コンパクト・デジカメで取った写真のコンテストとかあるから、出してみたら」

「え、ほんとですか」

「うん、なかなかいいよ」

智美は気分を良くして写真部を後にした。少し行つてから、ふ、と、思い出した。田端は、試合のあつた同じ日に智美の写真を撮つており、それをくれると言つていた。智美は回れ右して写真部に戻る。準備室の方には誰もいなかった。理科室の方にみんな行つていいのか、そこから声が聞こえてくる。理科室との連絡ドアの所まで来ると、何を話しているのかがわかった。どうも智美のことを話しているようだった。三神が田端に話しかけていた。

「彼女、どういう娘なの」

「え、木原さんのこと」

「そう」

「彼女がバスケット部のスター大石のカノジョだよ」

三神はちよつとの間、言葉を失つていた。

「・・・えっ、あの娘が。思つてたよりずいぶん普通の娘なんだ。もっと目立つ娘だと思つてた」

「ああ、俺も最初間違えた。大石が『好きな娘』がいてるって遠くから指差したんだけど、てつきり隣にいた娘だと思つてさ、その娘に声かけちゃつて。恥ずかしかった。・・・でも、彼女・・・木原さん、いい表情するときがあるんだ。・・・大石はそこを気にいつてるんじゃないかな。彼女、被写体として悪くない」

「ふうん。あたしにはよくわからんわ。・・・そういえば、さつき、あんなこと言つちゃつて、よかつたの」

「『あんなこと』って」

「『なかなかいいね』って言ったじゃない。確かに良いには良いけど、すつこい普通だったじゃない。ああいう言い方しちゃうと、『あたしって凄いのかしら』なんて勘違いしちゃうよ。あんた、部長になつてから、他人の写真を素直に褒められるようになったのはいいけど、ちよつと褒めすぎじゃない。あんたの悪い所だね」

「そうかな。勘違いするかなあ。『遊びで撮つた写真として、いい』とは、思わないかな」

「ほうら、やつぱり、これだ。人のを評価するときつて、もつと、勘違いしないようにちゃんと細かく言つた方がいいよ。タバッチ、本気で相手のこと考えてない。自分本位のところは、変わんないよね」

「うーん。みつちゃんに言われると、辛い」

智美はそこまで聞いてそつと部屋を出て行った。教室に戻ると自分の席に座り、上半身を前に倒して机に体を預けた。腕を枕にして目を閉じる。辺りには誰もいない。

しばらくすると、倉下桃子がやってきた。

「あれ、トモ、何してんの」

智美は気怠そうに体を起こし、何も言わずに机からメモ用紙を取り出した。一枚とって何やら書き出す。

それには、「ただ今、へこみ中」と書かれていた。

智美は再び横になり目を閉じる。

倉下は、一つ溜め息をつき、よしよし、そう言って智美の背中をポンポンとたたいた。

「姉ちゃん、もう出るよ」

玄関の方から利通の声が聞こえてくる。

「うーん、今行く」

デジカメをバッグに押し込むと、玄関へと向かった。

△つづく△

テーマ 競争

『蝶』



テーマ競作『凍る』

まてんろう

魔十楼

霜越邦彦

三、凍る

最近、不思議な事件が起きている。ここ半年で、急激に冷却されたと思われる、男性の変死事件が続いていた。警察は何の手懸りも掴めていないらしい。榊はその朝のニュースを見終わると、鞆を持って玄関へと向かった。その後を妻がついてくる。出かけるとき、妻はいつも榊に抱きついてくる。結婚して大分経つのに、いまだにベタベタするのが好きだ。榊は内心疎ましく思っている。新婚時は嬉しかったが、いつまでも続けば鬱陶しい。嫌気がさす。

会社帰りにバーに寄るようになった。何軒か試しに入り、行き付けになった店がある。ふらっと入った裏道にある店「魔十楼」である。その店には村山というマスターとママという若い女性が働いていた。彼女は村山の姪だという。

「あ、榊さん、いらっしやい。いいんですか、あんな

り毎日だと奥さん悲しみますよ」

彼女は営業的でない自然な笑みを見せる。榊はそれが気に入っている。

「ああ、構わない。一緒にいると鬱陶しくて」

榊は彼女とよく話すようになった。マスターに注意されるまで話し込むこともある。ママはさっぱりした性格で、恋愛感にしても変に夢見がちなところはなく、男を拘束する風でもなかった。

「こんな娘がいいんだよな」

一緒にいたいときだけ一緒にいられたらそれでいい。この娘とならそういう関係になれそうだ。ママも自分に気がある。彼女と話して、榊はそう思った。彼女とは、多少の罪悪感を感じながらも、次第にプライベートでも会うようになっていった。

そんなある日、仕事中、ママから携帯に電話がかかってきた。今日は自分は休みだから、うちに来ないか、という誘いだった。彼女が住む一人暮らしのマンションの住所を聞く。榊は少し迷いながらも行くことに決めた。

「いいのだろうか」

歩きながらも迷っていた。ふと、妻の顔が浮かぶ。駅前の大画面モニターではニュースを流していた。その二

ユースでは、例の謎の凍死事件のことを言っていた。

ママのマンションに着くとシャワーを借りた。お湯を出そうとしたが、出てきたのは水だった。それもかなり冷たい。凍死でもさせたいのかと思わせるほどだ。故障なのか、なかなか温かくならなかった。妻ならこういう失敗はしないな、と榊は思った。…凍死といえば…。榊は例の変死事件を思い出した。ある日、突然凍死体で発見されるらしい。何の脈絡もなく、突然亡くなるのだ。

…いや、あの事件でなくても、人なんていつ死ぬかわからない…。そう思う。…もし、このまま帰らなかったら、きつと妻は悲しむのだろうな…。妻の悲しむ顔が浮かんだ。水はやつとお湯に変わってきた。体を流しながら妻のことを考える。昔、妻から聞いた話を思い出した。親しい友人を事故で亡くしたことがあると言っていた。いつまでもベタベタするのは、「親しい人が、突然いなくなる」「そういうこと」に敏感になっているせいかもしれない。…いつも、これが最後かもしれない。そう思って過ごしているのだろうか…。今のままの生活を続けければ、妻とは別れることになるだろう。二度と会えなくなる日がある。…それは嫌だな…。シャワーは、今度は次第に熱くなり、熱湯のようになってしまった。たまらず止めて外

へ出る。…調子が悪いなら、言ってくれればいいのに…。

脱衣所で鏡を見ながら思う。

…帰ろうか…

夫婦の間にも、一期一会のような気持ちが必要かもしれない。榊は服を着ると、ママに謝り、家路についた。

ママはリビングのソファに腰かけ、雑誌を開いて見ている。隣の部屋からマスターの村山が出てきた。不機嫌そうに見える。

「魔夢まむ、今回は失敗だったな」

村山の方は見ず、視線を雑誌のまま口を開く。

「まあ、いいわ。『心の温度になるシャワー』か…。『お湯』になったら面白くないわね。やつぱり、いきなり絶対零度で凍ってくれないと。…このアイテム使った遊びも、何だか飽きちゃったな。また他の遊び考えよ」

「しかし、あいつもうまく凍ると思ってたんだがな」

「あら、わたしは失敗すると思ってたわ」村山は不思議そうにママを見た。ママは視線を村山に移す。「だって、奥さんのこと愛してるって、わかってたもん」

村山は呆れた表情になり、「フン」と言っただけでママの横に腰を下ろした。

テーマ競作「凍る」

過去の明日

橋口 さかえ

その人はまるでこれから大笑いをする様に、口を開けて聞いたことがないような声で喘いだ。胸元に虫でも這っているかと思うようなしぐさで掴むと後ろに仰け反った。私達はその光景を決して忘れないだろう。まるで、スローモーションでまわる画像を見るようにたつた三十秒ほどのその人の最後を覚えている。新しい商品がやっと世にでまわり、なかなかの売れ行きで今日ぐらいパツとやろうと居酒屋で集まった。盛り上がりもピークに達して、いつもの飲み会に変わる頃の事だった。私達はその人を尊敬していた。雨にも負けずを人に変えたようなその人は、声を荒げることもなく、部下の失敗には黙って対処し、声を掛けるタイミングを間違えることなく、人を育てる人だった。誰一人、その人を悪く言う人はなく仕事が終われば愛妻の待つ家に真直ぐ帰り、不摂生という生活を知らない人だった。

その人が、人のいう非業の死を迎えた時、私達はただ凍りついたように、動くことなく、いや、動くこともできず、その様子を見ていた。

その後のことは、はっきり覚えていない。

集団で乗り込んだ居酒屋は騒然となり、店の店員と同席していた半数が思い付いたように、電話で救急車を呼んだ。私は、貧血をおこしながら、なぜか、その人に水を飲ませようと頑張っていた。数人の女の子はただ糸が切れた人形のように集まって涙を流しながら、座り込んでいた。救急車に乗ったところまで覚えている。あんなに電話したのに来たのは一台だと、ぼんやり考えていた。その人はもうすでに命なく、さようならという言葉さえ残さず、私達の世界を去っていった。

それからの今までの時間、何をしてたのか私はほとんど覚えて、いない。私達の前には、その人が愛した妻が青い顔をして座っていた。かいがいしく動く近所の人が、お茶を運んでいるのを私たちは手伝う。着慣れない黒い礼服は出来れば着たくない一着だった。私はこの黒が似合わない。葬儀は内々にひっそり行われた。その

人が死んでしまつてからもう五日になる。

死因は毒死。殺害の可能性があると、警察は私達に言った。あり得ない事実。決してそんな死を迎える人ではなかつた。こそこそと誰かが目配せをして話している。その姿がむかついた。首を振り、ハンカチで目頭を押さえる人の姿が悲しかった。

「あんたたち、少し休みなさい」

その声を掛けてくれたのは、その人のお姉さんで、真っ赤になつた目はその人と同じように静かだつた。誰もこない応接間で私達はその人が愛した人と遠いざわめきを聞いていた。

「主人がお世話になつたのに…。私、きちんとお礼もいえなくて…」

私達の挨拶にその人の愛した人は落ち着いた声で話した。品のある横顔をそつと外し、ハンカチで目頭を押さえた姿は痛々しく、私達はまた涙を流した。ああ、帰つてこないその人を忘れられないということは、なんて悲しいのだろう。その人は死んでしまつた。

「警察は犯罪の可能性があるつて、犯人を捕まえるために協力して下さいっていうのよ。…、でもね。私が知り

たいのは、誰が主人を殺したのかじゃないの。……。あのね、正直に答えてくれるかしら。皆主人はいい人だつたつて、言うの。殺されるような人じゃないつて。自殺をするような動機もないつて。はあ。……。でももし殺されたのなら、どうして殺されたの。主人は何をしたのか、お願い、教えて」

私達はただ号泣し、それに答えることができなかつた。私達は知らない。その人はただただいい人だつたから。

その人の愛した人は黙つて窓の外に散る白い花をながめるように視線をそらした。明日くる過去の疑問を、その為に更に心痛めることを知っているように。

終わり

テーマ競作「凍る」

眠れる惑星ほしの美女

白坂 匡

「ねえ、おじいちゃん。この惑星青白く光ってきれいだねえ。」

「この惑星は凍っているんじゃない。」

「え〜！ 惑星って凍るのお……。ねえ、どうして凍っているの？」

「大昔に神の怒りがあったと言われているよ。」

「どうしてえ？」

「この惑星の人間が傲慢であったからと言われている。」

「ゴウマンってなあに？」

「自分が偉いとしても思いがることさ。そうして、自分がすべきでない神のやることまでやろうとすることだよ。」

「なんか、隣のテーブルで変なこと言ってるじじいがいるなあ。子供に教訓じみたことを教える為に、何も嘘教えなくたっていいのになあ……。」

「でも、さっきの流星群をよけるのに方向転換しすぎて燃料が足りないんだよ。この惑星で補給できないのか？ 星図には、補給可って書いてあるぞ。」

「確かに補給できないこともないし、もしかしたら無料ただかもしれないけど、この惑星はだめだよ。ここが凍りついているのは、確かなんだから。一応、伝説の惑星だといふのも本当だそうだし……。」

「伝説？ あのじじいの話が嘘だとしたら、いったい伝説の惑星の伝説ってなんなんだよ。」

「数千年前に惑星ごと凍らせられる技術を発明して、惑星ごと冬コールドスリープ眠スリープしてしまったというんだ……。」

「惑星ごと……。なんでまた……。」

「なんでも、お姫様にふさわしい王子様がいなかったからとか……。」

「え〜！ 大体、そんな高慢なお姫様なんか起こしに、誰か来たりするの？」

「来るらしいよ。この惑星は資源は豊富だし、科学は進んでいるし、逆玉狙いの自薦いい男達や科学者や使命感

に燃えた馬鹿や単なるミーハー男達が。」

「じゃあ、呪いならぬ冬眠をとける奴がいなくて、今もそのままなのか？」

「いいや。なんでもいい男センサーとかがあって、ある程度いい男が着陸すると、惑星ごと目を覚まして歓迎してくれるらしい。」

「へえ、便利だね。でも、何でまだ凍っているんだ？」

「お姫様のお目になう奴でないと、また眠ってしまうらしい。」

「着陸してみたいなあ。さぞ、綺麗なんだろうなあ。」

「さあ。」

「さあつて……。だつて着陸したんだから、誰かそのお姫様の顔見てるんだろう？」

「いや、帰つて来た奴の記憶から、お姫様のことだけが消えているそうだ。」

「なるほど。すごいドブスかもしれないわけだ。」

「そういうこと。補給とかで立ち寄つて、万が一センサーが反応して起きちゃって、気に入られたら大変だろ？だから、最近影の要注意惑星指定になつていて、誰も来ないらしい。触らぬ神に祟りなし。数千年もすると、さっきのじじいの話みたいのが本当に残るかもね。」

その惑星^{ほし}には、広大な宇宙^{スペース}港^{ポート}つきのお城と、王様とお姫様と、ちゃんと綺麗でやさしいお姫様と、その家来や召使や民があり、すべてが眠っておりました。ただ、お姫様には理想の高すぎる口うるさいばあやがついていました、とさ。

（教訓）人の話は、鵲呑みにせず、参考程度にしましょう。

お姫様もね。

テーマ競作『凍る』

凍った月

吉村千夜

月を見ると心が洗われるみたい、と朋子が言っていたのはいつの頃だったろう。もうずっと昔、三人でよくアパートの窓から見ていた月。何かと集まっては飲んだり食べたり、べろんべろんに酔って見たときもあれば、悔しさで泣きながら見たこともある。いつのときにも、真剣で・・・生きていることそのものが楽しかった。

楽しかった、なんて、過去形で言ってしまうのは哀しい。けれど、少なくとも朋子にとってはそれは過去形なのだろうなど、どんな時にも彼女の瞳で知らされる。

「いつも有難うね。ほんとに、感謝してるのよ」

朋子のお母さんが涙目で私たちに言う。いつも、いつも・・・癒されないのは、誰だろう。誰一人、幸せな顔が出来ない。彼女の部屋を訪れ、疲れ切って帰る道、遠

い遠い真つ暗な空に浮かぶのはあの日の月と何が違つと言っただろう。

「いつまで・・・かかるのかな」

「いつも、思うよ。今度でもう止めようかって。私たちが行くことに何の意味があるのか、わからなくなることもあるの。」

普段は温厚な美雪がまるでうんざりしたように言うのが、私は怖くなる。いつもならすぐに怒ったり泣いたり、一番感情が激しいのは私なのに。朋子と美雪は温和な夕イブだから、笑って私をなだめてくれた。いつも、私を支えてくれた。

朋子の婚約者がどんな目に遭ったのか、私たちには新聞やニュースで聞いたことしかわからない。馬鹿な若者に刺された。犯人はすぐに捕まった。朋子は動かなかった。それっきり、扉を閉じて、開かなくなった。

どうして、この世界はおかしくなってしまったのか。私たちが三人で月を見上げていたころ、私たちにとって世界は優しかった筈だ。あれからほんの数年だ。私たち

は気楽な学生ではなくなり、働いて責任を持つようになってきた。それでも世界が私たちを憎んでいると思うことはなかった。

三人で集まる回数も減ったけれど、何とか都合をつけて会える時が本当に楽しかった。それなりにうまくやっていたのだ。誰もがそうであるように、それぞれの人生に折り合いをつけながら。

そうやって、きっと誰もが年を取ってゆく。結婚し、子供を産み、育て、そんな当たり前の幸せは普通に与えられるものだと思っていた。

それが間違っていたのか・・・誰が想像するだろう。この苦しみを味わうのが、どうして彼女でなければならなかったのか、もしかしたらそれは私だったかも知れない、知らない誰かだったかも知れない。まるでゲームのように勝手に選ばれた。

日々のニュースは新しくなるだけで、どんどん忘れ去られていく、でも私たちは知ってしまった。これらの苦しみは更新され続ける。

逮捕のニュース、公判、判決、事件の起こった日（ア

ニバーサリー症候群と言つのだそうだ）、いろんなきつかけで記憶が掘り返される。それらが色あせる時間がない。少しずつ、暗闇に追いやっていったと思える度に光が当たる。また鮮やかな色の記憶と向き合わなければならぬ。

出来ることならその全てから、彼女を守っていきたいと思うのは・・・不可能なのだろうか。

凍りついた心は、溶ける時間を与えられない。

憤りだけが募ってゆく。私をほっといて、と思うのは当然だ。そして私たちも・・・もしも、私たちが訪れる度に、それらが更新されているのだとしたら・・・どんなに耐えられないことだろうか。

そう思いながら、帰る足取りは重いままだ。

けれど、望みを捨ててられないから、私たちは訪れ続けるのだろう。何がいいことなのか、その答えが出る日まで。

テーマ競作『凍る』

フユのかげら

フユが来るまえに 2

雪は止むことなく降りつづけ、辺りを一面の雪野原に変えてゆく。町を、人を、あらゆるものを白く染めてゆく。音すらも白く染め上げて……。

「白、白、白……」

窓の外を眺めながら、アンディはつぶやいてみた。部屋の中には小さなダルマストーブ。ところどころ傷んで隙間風が入ってくる木造の、この小さな小屋を暖めるのに十分とはいえないが、窓の中で踊る炎がかじかんだ心を溶かしてゆく。

「はいよ、お客さん」

小屋の主人がブリキのマグに熱いコーヒーを注いでくれた。濃いローストのコーヒーにシングルモルトを豪快に加える即席アイリッシュコーヒーは、じんわりと内側から体を温める。マグの暖かさを指先に感じながら再び窓の外を眺める。凍てついた大地には見るものもなく、

ただ荒涼として……。

「いつたい、いつまで居座る気ですかね？ 今年のフユは」

例年になく長い寒波の影響で、もう何日も太陽の光を拝んではない。どんよりとした厚い雲は隙間なくびっしりとこの国を覆っているようだ。

「………フユとは違っ」

「？」

「フユってなあこんなもんじゃねえ。フユってなあ……」

小屋の主人は何かに怯えるように体を震わすと、それきり口を閉ざした。深い色の瞳がストーブの小窓で踊るオレンジを見つめ、主人の顔を照らす炎が、深い年輪を刻まれた主人の陰影を濃くして。

やがて、主人は再び口を開くとポツリと彼に尋ねた。

「あんたらの世代じゃあ本当のフユってもんを知らねえのも無理はねえが……あんた、この町の外へ行ったことがありなざるかい？」

「この、町の、外？」

彼はこの町で育った。この町以外に町があることを情報として知ってはいたが、この町を出たこともなければ

出ようと思ったこともなかった。けれど……。

「昔はフユも3月もすればいなくなるもんだったがな」

深いため息とともに小屋の主人の口から吐き出される言葉。

「あんときやあひどかった。1ト月も早くやってきやがって、みんな冬籠りも間に合わなくてなあ」

と、俄かにアンデイのうちに蘇る記憶。知っている。いや、覚えている。

「あれからだ。われわれがこんな地下街に住むようになったのは」

猫だ。

「地上に文明を築くことは、やめた。どんなに一所懸命に築いてもフユがみんな壊しちまう。たった3月でなあ」

ペギーを置いてきちゃったんだ。ソファアの下に。

「フユつてのはな、いきなりやってきてみんな凍らせちまうんだ。なにかもをな」

ジエフの監視艇は出航できなかった。ジュリアが泣いていた。

「フユつてなあこんな優しいもんじゃねえ。……悪夢だよ。神様の悪い冗談さね」

パパは、帰ってこなかった。

「さ、もう終いだ」

小屋の主人はそう言うと、小屋の明かりを落とした。のつぺりとした石の壁が不意にアンデイの前に現れる。

少年のころから見慣れた無機質な地下シエルターの壁。こともホログラムあかりの落とされたパブの真ん中にはレトロなダلمアストーブが相変わらず赤々と火を灯していた。

フユが還らなくなったのはいつのころからだろうか。空

から突然落ちてくる氷柱たまごから孵った子供は、3月で消えることなく街を破壊し続けながら成長を遂げ、その子供

が氷柱を生んだ。世界はフユに覆われて凍りついた。

そして、われわれは地下に潜み、やがて地下に街を作り、待つしかなかった。いつか彼らが絶滅する日まで。

幻想詩人 2

橋口 さかえ

前回のあらずじ

小さな文具卸しの会社に勤める京子。同僚の美鈴、高木と共に企画課で年末商戦をこなしていた。話題は新人飯島の人の良さと彼氏の良さ。そんな噂をした翌日、飯島が相談を持ちかけてきた。

軽く演歌が流れている店内は、常連の客でいっぱいになっている。オフィス問屋街を一本入ってすぐ、郵便局が目印のこの店は美鈴のお気に入りだ。何か落ち込むと必ずここに来る。先に見つけたのは私だと京子はいつも思うが、使用頻度は美鈴の方が断然多い。最近が高木も他の同僚もこの店をよく使う。何がいいのか。まず、「お母さん」がいい。気つぶも割腹もいい「おかあさん」はこの店の経営者だ。ハッハと世間を笑い飛ばし、落ち込

んだ美鈴のような客には激を飛ばす。最高の肉じゃがは常連客が必ず小鉢で注文し、カウンターに並んだ惣菜は季節の食材が最高の味付けで盛り付けてある。

のれんをくぐった京子と飯島は「おかあさん」の笑顔で迎えられた。

「あら、京子ちゃん、可愛い子ねえ。後輩かい？」

「そう。「おかあさん」いつもの肉じゃかと生中。えつと飯島さん、何飲む？」

「私もビール」

「はい、ちよつと待っててね。あ、カウンターにするかい」

「う、いいや。こつちに座る」

「なんだ。プライベートの相談かね。じゃ、奥にしな」
相変わらずさつしのいい「おかあさん」は奥のテーブルをさつさと片付け、席を作ってくれた。

「「おかあさん」こつち、ビール！」

常連のおやじが「おかあさん」に声を掛ける。

「もう、あんたの分、おわりだよ！飲み過ぎだよ、全く」「ちよつとお」

飯島はくすくす笑いながら、京子の差し出したメニューを眺めた。

「ああ、ちよつと、うるさいかな」

京子は場違いな場所を選んだかと、顔をしかめた。考えてみれば年末、常連客が何回も忘年会をしているらしい。ここ何年もそうだったことを忘れていた。今日は常連 A と B。その前は常連 B と C というように忘年会を連日していたっけ。

「なんか人情劇場って感じ。こういうとこ、実在したんですかね」

「飯島さん、渋いこというね。まあ、その通りかもね。ここね、美鈴のお気に入りなんよ。「おかあさん」に怒られにくるの。変な言い方だけどね。あいつ、結構ナイーブなところあってね。いつも、自分のこと茶化してごまかしてるけど、本当はムチャ弱いだよ。すぐ、撃沈してしまうタイプ。で、ここに来て「おかあさん」に喝いれてもらうの」

「田中さん、ナイーブで怒られるなら、私もつと怒られますよね」

飯島は困ったように微笑んだ。京子は一瞬顔をしかめたが、何も言わず、メニューを指さした。

「これ、注文しようか。たこ酢。あとお勧めはあさりの酒蒸し」

「京子さん、あの」

「まず、話をするときはアルコールを口にして、リラックスしてから」

「あ、はい。じゃ、私、チーズボール食べたいな。チーズ大好きなんです。京子さんは？」

「私もチーズ好きだな。一番好きなのは、チーズ蒲鉾」

「ああ、コンビニで百円で売ってる。私、あれ、営業中にとうがらしの入ったの時々食べるんです」

「私も食べてた。あれね。春、桜見ながら食べるとうまいんだよ」

「プチお花見？」

「うん、プチプチだけどね」

二人は顔を見合わせて笑った。

美鈴は首をポキポキならすと、大きく伸びをした。さて、今日の仕事は終わり。なんか疲れたな。一人暮らしの寒い部屋に帰るのが何となく寂しい。実家に年末帰るまであと2週間ある。コンビニでお弁当はなんか嫌な気分。

「おかあさん」に会いにい「っかな」

ぼそっと呟くとそれが最善の方法に思えた。京子は今

日はそうそうに帰ったし、一人で行ける店は簡単に思い付かなかったのもある。

「うわー。なんか肩こるー」

企画室のドアを蹴飛ばす勢いで高木が入ってきた。

「あれ、何。美鈴ちゃん、一人なん。京子ちゃんは？」

「あいつ、帰りおつてン。私は、今、終わったところ。課長はどうしたの。一緒に出かけたんとちゃった？」

「いつもの直帰」

「ああ、そう」

高木は営業靴を下ろすと、椅子にどかっと腰を下ろした。肩をぐいぐい押す。

「ねえ、美鈴ちゃん、この後、時間空いてるなら、一緒にマッサージ行こうよ。こないだんとこ」

「うーん。私「おかあさん」とこ行きたいからな」

「一人で、行くの」

「……。一緒に行くか？」

「そりゃ、行きますっさ。はよ、帰る用意しやあ」

「わかっとなるて」

「わかってるんですけど」

飯島は酒を飲むと口が重くなるタイプだった。京子は

何度も鎖ぎ、飯島が本題に入るのを待った。ぼっちゃりおつりの飯島は、白い顔を赤く染め、食べるか食べないのがはつきりしないしぐさで肉じゃかをついている。だあ、まどろっこしい！と本心思っている京子はすでに二杯目の生中を飲み干す寸前だった。

「自分でもわかっているんです。この性格直さないと、人に流されてしまうってこと」

「うん、うん。でも、営業の時の飯島さんは、しっかりと対応してるし、奥さん方にも好かれてるし、営業実績も伸びてるじゃない。みんな誉めとるんやよ。そんなこと心配しやんでも、大丈夫やて」

「いえ、営業は全然、心配してません。お客さん、みんないい人だし。プライベートなことで困ってるというか、引き受けなきゃよかった、というか」

飯島は一杯目のビールを飲み干した。

「何飲む？ウーロン茶とかにする？」

「ええっと。もう少し飲みたいかなあ。あ、梅酒サワーにします」

「「おかあさん」！梅酒サワーとチュウハイライム！で何、引き受けたの。何にしても、飯島さんなら、やっぱり無難に出来るでしょう？」

「はあ、それが、バイトで……。いかがわしいとは思ってんですけど、断りきれなくて……」

飯島の言葉尻が消えるのを京子は不安に思った。あかん。いかがわしいバイトはあかん！お姉さんは許されへん。何とか説得して断れせなくちゃ。京子は二杯目のビールグラス越しに飯島を見た。ぱつと見、呑気におつとり構えた飯島は、見た通りのお嬢さん育ちだ。今も実家で親兄妹と仲良く暮らし、何の問題もない日常を過ごしている。と思っていた。その点京子は兄夫婦の同居を切っ掛けに家を出て、波乱万丈ではないが、住民票に世帯主と明記され、ある意味自立している。京子は、悲しくなった。何の問題もない日常生活って、なんだろう。会社とアパートと彼氏の家のルートが私の中にインプットされた生活だ。

「ああ、飯島さんってある意味、人生充実してるかも。私、そういう変化ってないから、アドバイス自信がない。もう、それだけは先、言っておくよ」

「やだ。京子さん。へこまないで下さい。いかがわしいの内容、聞いて下さいよ。あの、月百万のバイトなんですけど」

「それはいかがわしい、ていうか、うらやましい」

「私、断ったんです。最初は」

飯島はおかわりの梅酒サワーを口に含み、一息ついた。

「どんな仕事」

「それが、女の子が行きそうなお店に毎日、一緒に行くって仕事で、今日で一週間目です。この後その人と会って、今日も西屋町の「リンクス」に行く予定です」

「それ、こういつちやなんだけど、行くだけ？」

「ええ、大抵しゃべったり、しないんです。ただ、一時間程行って帰るだけ。時間の都合もこちらに合わせられるんで、それほど負担はないんです。それだけの為に百万もくれるなんて。変ですよ。私、お金も払ったことないんです」

京子は飯島の顔を見つめ、黙ってもう冷めてしまったチーズボールを口に入れた。冷めてしまったそれはなんと味気なくただ塩っぱい味だけが後味に残る。ここに来て、ほぼ四十分。なんのアドバイスも出来ない自分が少しむかつくし、こんな相談に答えられる奴は絶対いないと、思った。確かに、飯島がこれはビジネスだといければ、成立するだろう問題だと思う。何が悪いことをしているわけでもない。飯島自身、それに対して実害を受けているわけではない。京子の中でいかがわしいの定

義が崩れそうになる。たとえば、援助交際。いかがわしいよな。

「んつ。それって新種の援交とか」

「だったら、それはそれで、きつぱり断れます。私が恐いのは、その人、人を探しているみたいなんです。それでもし相手の女性を見つけたしたりして……」

「その女性に何かあつたら、恐いな」

「……。はい」

やつと飯島の考えていることが京子にわかった。その可能性が有るとしたら、飯島はこのバイトから手をひいたほうがいい。

「どんな人、そのバイト依頼した人って」

「ふつうの人という概念は外した方がいいです。外見じやなく性格的に。なんて言うかな。空気のように心配があまりしない影の薄い人なんです。外見とかなり違います。だいたい一緒に歩いてるとすれ違う女の子の大半はその人に視線を向ける程かつこいいタイプ。でも、そのことに彼は気がついていないの。お店に入ってもウエイトレスとか彼にチラチラ視線を向けて。でも、ふつうに注文してそのまま。たぶん、自分の容姿に気がついていないんだと思うんです」

「そんな男、始めて聞いたよ。ふつうそこまでかつこいい奴って、自意識過剰なのに」

飯島は頷く。確かに無気味だ。やつぱりいかがわしいの範疇に入るな。やつぱりお姉さんは許せませんと、京子は思った。ただ、な。

「別にただ興味があつてのことだけなら、どうやって断ろうかと思つて。その人、職業詩人だつて言つてたし」

「……。何つて」

「詩人。私、そんな職業が存在するなんて知らないから間に受けてしまつて。詩にする材料探しに百万も払うなんて芸術家つてすごいと思つたんです」

「それで引き受けたのか。詩人つてすごいなと思つて」

「はい、やつぱり、この性格直した方がいいですよな」

「つていうか、もう、おばかさん」

「はい」

飯島は困つたようにグラスを取ると氷の解けかかった梅酒サワーを口に含んだ。

「今日も会うの？」

「ええ、この後、九時にその駅で待ち合わせてるんです」

「九時か」

あと一時間ほどある。どうしたらいいか。京子は悩んだ。

美鈴と高木は「おあかささん」の店のドアを開いた。おやじの笑い声と「おかあさん」の威勢のいい声に迎えられる。

「遅かったじゃないの！おや、今日は高木君も一緒。最近仲いいじゃないの」

「もう、誘う相手がいなかったただけ。あれ、京子じゃん。飯島さんも」

「何、待ち合わせてたんじゃなかったの。二人ともビールでいいね」

「うん」

美鈴に気がついた京子が手を振り、飯島が振り向いた。何やら情けない顔をしている。

「何何、ちよつとこんなところで後輩虐めてんとちゃう」

「ばあか。飯島さん。こつちの隣の席においで。そつちは美鈴と高木君が並んで座るから」

飯島がくすつと笑って席を立つ。

「何、いつてんの。気持ちわりい」

「そつだよ。俺は飯島さんの隣がいい」

「あんたたちはセットで眺めた方が面白いからね」

「キツ。あたしらはあんたの娯楽か！」

「そつだよ」

がたがた椅子をならして奥に美鈴、その隣に高木が座った。

「はい、ビール。そこにあるの取りあえず、つまみなよな。何か他、食べる？」

「もちろん」

「おかあさん」は美鈴と高木の注文を聞くとカウンターに戻った。

「本当に仲いいですね。田中さん、高木さんと付き合い始めてどれくらいなんですか」

飯島が自分のグラスを取りながら聞く。

「えつ！やだ、わたしたちそんなスタディな関係じゃないよ！」

「プラトニックでもないし！」

美鈴と高木はあわてた口調でバカなことを口走った。ふたりとも真面目に答えることが変で京子と飯島は一瞬言葉に詰まり、笑い出した。

「あたし、あんたら二人の子供が見たいよー」

「バカ京子！いい加減なこと言うな！」

「そうだよな！俺がこれから築くべき麗しい家庭を否定するよな」

「なんやて！高木。私じゃ、麗しい家庭は築けんというのか！」

「当たり前やんか。美鈴ちゃんじゃ、明るい家族計画になるやんか！」

飯島が腹を抱え、涙を流している。二人が混ざったことで、飯島と京子はさつきまで話していた問題に答えを出せないまま時間が過ぎていく。時々チラツと思いついた京子は飯島の様子を見て、飯島は時々時間を気にしていた。

「何、飯島さん。これからデート？」

時計を盗み見た飯島に高木が気がつく。

「ああ、飯島さんの彼氏、かつこいいよな」

美鈴は悪気はない。飯島は一瞬京子を見た。

「うん、この前、美鈴と一緒に歩いて見たのを見たやて」

飯島は首を振り、情け無さそうに違う人です、と答えた

「私の彼、もつと愛らしい人です」

そういうと、鞆のポケットを探り、パスケースを出す。

「のびた君や」

三人は声を揃えて言った。そこにはニコニコした飯島と丸顔に丸眼鏡の愛らしいらしいのびた君が写っていた。二人はこの上なく幸せそうに笑っている。

「ああ、勘違いしてもうたわ。だって並んで歩いていたからさ」

美鈴はしまったという顔をする。高木も何やら気まずい顔をした。

「なら、これから、のびた君とデートなんやね。ごめん変なこと言つて。私、アルコール入ると口軽くなつてさあ。気にしやんでね」

「……。いいんです。私も後ろ暗いところあつたから、言い淀んでしまつたんです。美鈴さんが見た人、私、確かに一緒に歩いていました。否定しません」

飯島はそう言うのと微かに笑う。京子は飯島が本当は強い子なんだと、実感した。性格が弱いわけではない。

「飯島さん。私、この二人には黙つとれへん。さっきの事、話していい。で、三人でどうしたら最善の方法か、飯島さんにアドバイスする」

「ありがとうございます。私も京子さんにそう頼もつと思つていたんです」

そう言うつと、飯島は席を立つた。鞆から財布を取り出す

「いい、後輩にお金はもらえない。払っとく」

高木がそう言うと飯島は何が言おうとしたが、三人の顔を見渡しにこつとした。

「ごちそうさまです」

飯島が店を出て行く。

「ごちそうさまです」

京子と美鈴が高木に頭を下げる。

「あんたらは割り勘や。で、飯島さん何話したンヤ」

3に続く

あした、桜の下で

吉村千夜

映画の宣伝で、「ほんとうの夫婦のあり方」とか、「究極の恋愛のかたち」とか、ひとつに定義づけられたキャラクターを見る度に、ゆづきはどうにも突っ込みたくなってしまう。だって恋愛のかたちなんて、それぞれ違うものだから、これが究極だなんて誰にも決められない。どうしてこんなに安易なコピーをくつつけるのか。君らそれで納得するんか、などと映画の登場人物にまで突っ込む始末。

「そういう性格やねんから、しゃあないけどな」

彰介には一言で一蹴されるが。そういう自分はどうなのよ、と心の中でまた突っ込む。こいつがどうも一筋縄ではない奴だからな。

初めて小原彰介の名前を名簿で見たときは「なんちゅ

うぶざけた名前や」と思った。そしてつい、口に出してしまった。そしたら隣にいた男子が

「悪かったな。好きでこんな名前ちゃうわ」

と呟いた。高校に進学して、初日目のことだった。

そこから、ゆづきと彰介との付き合いは続いている。

付き合いと言っても、悪友・親友としての腐れ縁だ。そこが確かに「微妙」と言えば「微妙」なのだけだ。

ゆづきはいつも恋をしている。していたい女だと思いつく。一人暮らしをしているからかも知れない。春は一緒に桜を見たい。夏はまぶしい光の中で楽しく遊びたい。秋の寂しさを共有したい。冬の冴え冴えとした空気に暖かさを感じたい。それは誰かと一緒にいたい。大好きな人と一緒にいたい。

いつも・・・多分・・・たとえ片思いであっても、好きな人がいると幸せだった。いや、それは寧ろ片思いだからだろ。学生の頃にいつも胸を痛めながら、好きな人を目で追っていた、それが一番幸せな時だったのかも知れないなんて、大人になって考える事だから。

だから最近のゆづきはちよつと疲れている。人を好きになるのは勝手だ。でも付き合い始めたら、それは立派

な人との関係だから、独りよがりではいられない。自分の空想どおりにはならない。好きで好きでしようがないから、苦しむこともある。苦しいことが楽しめる人なんて、そうそういるもんじゃない。

そこで悪友たちの登場だ。みんなそれぞれ、似たようなことを感じている。疲れたり、イライラしたり、ストレスはたまる一方。職場の仲間にもいい奴はいる。仲良しはいる。でも、それでも、昔からの友達たちはちよつと違うのだ。

高校のとき、彰介にはいつもつるんでいる仲間が二人いた。そいつらともゆづきは仲良しになつたけど、でも一対一で会いたいと思うほどにはなれなかった。

彰介だけは、全く最初から違つた。あまりに気持ち合つので、私この人に恋したかも知れない・・・なんて思いたくなるほどだった。

一週間ほど考えて、やつぱりそれは違つかな、という結論に達した。ちよつとそれはちやうんちやうん？ほんまにええ奴や、こんなに気の合う男も初めてや、大好きや、でも恋ではない。それはきつちり理解できたつもりだ。何でか、明確な理由は言葉に出来ない。でも、わ

かる。ちやうねん。な？

たまたま、男の子にも親友が出来た。それだけのことだ。こんなに仲良しなんだから・・・それだけで、充分なのだ。

さあ、けれど、おはらしよーすけさんにとつて、うえだゆづきさんはどないでっしやる？

わかりまへんな。人の気持ちなんて。

だいぶ日が長くなつてきた。道を急ぎながら、ゆづきは空を見上げる。まだまだ寒さは厳しいけれど、五時にはもう暗くなつてきていた真冬の頃に比べれば、六時近くても明るさの残る薄曇りの空は、確実に春への一歩を感じさせる。まだ冬の空気たちは、私たちを忘れないでとばかりに頬を突き刺してくるけれど、その中にほんの少し、暖かさが混じつてきた。切なさと、微笑みたくなるような温もりと。心の中の葛藤のように、身体ごと包み込んでくる。

こんな季節の移り変わりのときには、言葉に出来ない切なさと期待が心の中に入り混じる。春という、次の季節に向けての不安も、そして喜びも、これまでの同じ季節に感じてきた様々な気持ちが積み重なって、胸の中が

いっぱいになる。

待ち合わせで有名なデパート入り口付近、それでもちよつと目立つくらい格好いいのが、ゆづきの目指す人。背が高く、ちよつどはかり男前で、ふたつ年下の松島とは、付き合い始めて二ヶ月くらい。普段から外見は二の次だと考えているゆづきには珍しい選択だと、よく周囲に言われる。

そうなのだ、ゆづきの好みときたら、くたびれたヒゲ面のおじさんだったり、どう見ても人の良さだけが取り柄のような目立たない坊主頭だったり、前髪前線が著しく後退した俳優だったり、いつも「この人素敵！」だの「めっちゃ好みやわあ」と胸きゅんさせて、或いは彼氏として連れてきたりしては周囲に『またか』と思わせ続けてきたのだ。

この場合、「やっぱなんやかんや言うても顔かいや」とやっかみ半分で言われても仕方ない。でも今のゆづきは松島の顔が好きで好きでどうしようもないから、黙って笑っておく事になっている。

(ちなみに、おはらしょーすけさんは若くして髪の毛の悩みを抱えているタイプ。顔はと言えば、ドラマで主人公の弟とかに出てきそうなるふつーのたれ目)

む、どうしてここで彰介を思い出すのか。いかんかん。

話を元に戻そう。松島は職場の後輩だが、好きと言ってきたのは彼だった。流されやすいゆづきはあっさり承知して現在に至る。

恋愛って、そういうもんなんやるか。時々ゆづきも悩むことがある。映画で見るとような大恋愛に、誰だつて少しは憧れるもの。けれど、告白されてその気になって、今では大好き、なんてどうにも主体性がなさ過ぎる。食わず嫌いの食べ物無理やり食べさせられたら結構美味しかった、くらいの情けないエピソードで、ドラマにもなりそうにない。

それでもゆづきは幸せだった。松島はゆづきを見ると、本当に嬉しそうな顔をする。この笑顔にゆづきは負けたのだ。

てなわけで、今日の松島も嬉しそうだ。情けなく緩んでいく自分の顔を意識しながら、ゆづきは松島にくつついて歩いていく。おかしいなあ、最初は確かに私の方が優位に立っていたような気がするの。そんな打算的な考えも、ちらつと頭を掠めただけだ。

松島のいい所は、気取らないところだ。外見の割には真面目で堅実なので、ふたりで行くのはいつも安い居酒屋。こういう顔の男はみんな、薄暗くて雰囲気のあるバーとかでカクテル片手に女を口説くものだと思うっていたゆづきには、これまた新鮮で嬉しいことだったりするわけだ。

「お疲れ様あ」

と乾杯し、ビールをぐーっと飲んで、ああ、幸せ。ゆづきはこんな自分をおやじな女とはつきり認めている。しかしながら、向かいに座っている松島も、見た目に反してかなりおやじなので、まあお互い様というところだろうか。

「春闘の回答も出たみたいやね。どーにも不況やなあ」

「うえっ、いきなりその話題、何とかならへんの。あんたいくつよ？」

「こういうこと、真剣に考えたらあかんのか。まあええわ、それよりゆづちゃん、週末はどないだったん」

「ああ、大丈夫やわ、空いた空いた。どこ行く？ 私、神戸の、前に一度行ったアウトレットモールあるやん、あそこ行きたいわあ」

「あーあそこね。良かったたよなあ、海も見えて。行こう

行こう。」

「たまには弁当でも作ったるか。有難いでえ、滅多に出えへん私の愛情弁当」

「ほんま、ほんまに作ってくれんの？ いや、雨降るんちやうやるか」

「ありがたみのないやつやな。もうええ、作ったらん」

「嘘うそ。でもゆづちゃん、早起きするとぜーったい、車ん中で寝てまうやんか…それがちよっとなあ…」

「うっ、イタイとこ突かれたわ」

ああ、楽しいなあ。松ちゃん、大好き。なんて、もう酔っ払っとるな。

女は恋をして充実すると、綺麗になる。それは本当らしい。その証拠に、充実しているときに悪友どもに会うと、すぐにそれがばれる。

「ゆづ、楽しそうやなあ」

やはり高校からの付き合いの加代子が言った。本日の参加者は、彰介と加代子、彰介と小学校からの悪友である篤。休日の、気持ちのいい昼下がりだ。

「ま、見ただけでわかるな。いつものことや。」

彰介は鼻で笑うように言った。なんやと、たれ目の脇

役顔のくせに、鼻で笑うな言っんじやああ。

「今度の彼氏つてめっちゃ男前なんやろ？」

「めっちゃかどうか知らんけど。まあ、整ってる方とちやうの」

「余裕こいてんなあ。誰や、アタシは顔のええ奴は嫌いとかめかしとったんは」

篤は呆れ顔だが、こいつも濃い顔の上、超美人の彼女がいるのだ。他人のことは言えまい。

「しかーし、今日はゆづだけを攻める訳にはいかんでえ。なっ、しよーすけっさんっ」

篤がにやにや笑いながら続けたので、ゆづきも加代子も早速話に飛びついた。

「なになに、ついに彰介にも春が！」

「それはめでたい！」

ふたりではしばし彰介を叩くと（よくある『突っつく』なんて生ぬるいことほしない）、彰介は半ばうんざりしたように、「あーもうやめろっ」と手を振った。

「ほれ、おきまりのこれ」

そう言つと、携帯を取り出した。

仲間が集まれば何かと恋人の話も出る。お互い違う仕事をしてそれぞれ生活は見え、相手の顔を見た

い見たいと（得に女組が）騒ぐので、集まるときには写真をもってくるのが決まりになっている。近頃は、便利なカメラ付きケータイをみんな入手しているので、それで相手の顔を写してくるのだ。

「どれどれ」

口うるさい女どもも、一瞬だまる。それから、口々に感想。

「いやっ綺麗やん」

「ちよつとホラ、あの人に似てへん・・・ほら、アメリカの女優の・・・」

「あ、わかるわかる、あれやろ、『スピード』に出っただ・・・」

「サンドラ・ブロック！」

最後の一言は合唱だった。みんなそう思ったらしい。

「よう見つけてきたなあ、あなたには上出来やないの。合コンかあ？」

「ちやうわい」

彰介はぶすつとして言った。彰介は（そしてゆづきも）合コンが苦手なのだ。

「これは、紹介。職場の奴の。」

しばらく、彰介をつついて話に花が咲く。ゆづきも松

島の写真を見せて自慢した。

しばらく話してから、加代子が「あ、私そろそろ」と腰を上げた。

「あ、俺も」篤も立ち上がる。ゆづきと彰介も黙って椅子を立った。

方向の違う二人と分かれてから、ゆづきと彰介はゆづくり歩き始めた。今日は、もともと二人で約束していたのだ。

「今年もそんな季節になったねえ」

毎年この時期に、一度だけ、二人は『高校生のデート』をする。それは初めて出会った、あの高一の年、三学期の終業式が終わったときに始まった。

その時のクラスはとても、とても楽しかった。みんな仲良しでまともりも良く、毎日学校に行くのが楽しみで仕方がないなんていう、今までにない素敵なクラスだった。

そんなクラスとも、今日でお別れだ。なんだかしみじみと寂しい。翌日、みんなで集まってパーティーをしようという約束はしてあったが、その日は委員会の送別会など行事もあつて出られないクラスメートがいるため、

特に予定もなしに下校しようとしていた。

ゆづきは軽いため息をついて、カバンに手帳を投げ込み、少しの間ぼうっとしていた。

今年一年、ほんとにいろんなことがあつたなあ……入学するときには、どんなクラスだろう、意地悪な人はいないかしら、親友と呼べる人に出会えるかしら……など、様々な期待と不安を抱えてここに来た。ゆづきは中学のときに、あまり友達に恵まれてなかつたので、余計に不安でいっぱいだったのだ。

でも、そんな心配は一日で吹き飛んだ。彰介と出会つたあの日から、ゆづきの一年は、多少の辛いことはあつても、いいこと続きだったと思える。そんなことを……つらつらと考えながら、ぼんやりと黒板を眺めていた。

そうしたら、彰介がふらりとやってきて、こう言ったのだ。

「ゆづ、ひとつ頼みがあんなんけど」

ゆづきはほうつと顔を上げた。「何?」

「あんな」彰介はガラにもなく、少しばかり照れ笑いをした。「散歩、付き合つて欲しいねん」

「散歩?」

「そう、散歩」

「ええよ」

ゆづきはあつさり言った。とにかく寂しい気持ちを、暖かい方向へ持っていきたかった。彰介と一緒に、なおいい。入学からの一年足らずで、二人は本当に大事な仲間になっていったのだ。

どこへ行くともなくぶらぶらと二人で歩く。春先にふさわしい、のどかなお天気。暖かな陽の光がどんなにか優しく二人を包んだことだろう。

坂を下り、閑静な住宅街を抜ける途中、小学校がある。その校庭から、塀を越えて、それは見事な桜が道路にまで突き出していた。

二人は思わず足を止めた。ゆづきたちの学校にも桜はあつたし、この先をもう少し行けば近所の人たちがたくさん集まる、桜の綺麗な公園もある。だが、人々が通り過ぎてゆく道の上に、こんなに見事な桜が咲いていてもなかなか一人では足を止めてゆっくり見上げることなどない。

まるでデートみたいなのに、二人で歩いていたら、自然さもなく立ち止まることが出来た。そのことが、一瞬にして二人の心に理解できたのだ。

「・・・別に、何か用事があるわけやないねん」

彰介が言った。

「俺な、『高校生のデート』みたいななの、してみたかってん」

ゆづきは桜に見入りながら呟いた。

「何やその、『高校生のデート』って」

「せやから・・・マンガとかに出てくるやん、高校生が学校帰りとかに、二人で並んで歩くつての。それ、それがしたかつたんや」

「何や、そんなことが」

ゆづきは振り返った。彰介つて、ちょっと昔のセンチメンタルなマンガが好きなんやつたな。なんだか彰介が可愛らしくなつてきて、思わず笑つた。

「ほんなら、ほれ、手エもつなごうか」

ゆづきが彰介の手を取つた。あつたかい。

「ま、年度末出血大サービストとこかな」

「サービス言うな。商売女みたいや」

「しつづれいねっ、付き合つて欲しい言つたん、どこのどいつや」

そのまましばらく桜を見ていた。ぼかぼかと暖かい日差しの中でほんのりピンク色の桜、こんなにやわらかく綺麗な桜は初めて見たと、そのときゆづきはほんとう

にそう思ったのだ。

次の年もまた次の年も、桜の時期になると彰介はゆづきに「散歩」と言ってきた。そしてそれは毎年の恒例行事になってしまった。

これだけは、ふたりだけの行事だった。初めてそうしたときから、これは『高校生のデート』だったのだから。章介の憧れた昔のマンガのように、二人だけでゆづくり歩いていくものなのだから。

それは桜の魔法だったのだろう。あときの桜はあまりにも優しく、美しく、その後辛いことがあったときにも一番に思い出しては心を癒す事のできる、大切な情景になってしまったのだ。そしてそれは思っていた以上に、二人にとって宝物のひとつになっていた。だから翌年、彰介が「散歩」と言ったとき、ゆづきはすぐに承知したのだ。

毎年、それは二人の心の拠りどころのように繰り返された。そして今年も・・・もう、何も言わなくてもそれは「約束」されていたのだ。

小学校までの道のり、映画の話などつらつらしながら、二人はゆづくり歩いた。今日もいい天気だ。しばらくく

らだらと坂を登って、小学校の角を曲がったらあの桜だ。毎年その角を曲がる時、ちよつときどきする。今年あまり咲いてなかったらどうしよう。もし、かなり散つちゃっていたら？ いつも「大体今頃かな」という見当をつけて来るので、二度ばかり、今ひとつ満足できない咲き具合だったことがあったのだ。それ以来、角を曲がる瞬間に緊張してしまう。

今年の桜は・・・いい桜だった。あときの桜のように、優しく、誇らしげに、けれど当たり前そこに立っていた。

角を曲がると、手をつなぐ。それから黙って、桜を見上げた。

いつもの・・・いつものことなのに・・・ゆづきはふと、思ってしまった。一体こんなこと、いつまで出来るんやろう、って。

あときの桜から数えて、今年で十二回目の桜だ。干支で言つと一回りしてしまった。だからだと、年齢ばかり重ねていって、私たちはいつまでも変わらないと思っていなくても、私たちを取り巻くものたちは少しずつ変わっていつてしまう。

結婚もするだろう。子供も生まれるだろう。そうなっ

たら、こんな『高校生のデート』なんて続けていけるだ
るうか？ どちらかの、もしくは両方の相手が嫌だと言
ったら？ 嫌と言うに決まってる。自分だったら、そん
なのは嫌だ。だったら・・・

「今年も咲いてて、良かったな」

彰介の言葉が、ひどく寂しい響きでゆづきの胸にこた
えた。なんだか、これで最後だと言っているような気が
して。ゆづきと同じことを彰介も考えていて、いい加減
見切りをつけようよと言いつつ出している感じがして。そんな
ことを言われたら、・・・ゆづきは、泣いてしまいそうな
気がする。

・・・でも彰介は、そのまま呑気な口調で話をする。

「あ、そうや、うちのおかんが」

「わかった」

「・・・お前・・・人の話をさえぎんなや」

「だってわかるもん。いつものことやし。そろそろやと
思っとったし」

ゆづきは可笑しそうにくすくす笑う。

彰介の母は世話好きだ。八年前、ゆづきの両親が転勤
で大阪を離れてから、ずっと定期的にゆづきを夕食によ

んでくれる。

これには伏線があつて、ゆづきの母と彰介の母が親し
くしていたからなのだ。しかしそれは、ゆづきと彰介の
気配りあつてこそと言えた。というのも、ゆづきの一家
は、ゆづきの高校入学の半年前に大阪に引っ越してきた
ばかりだったのだが、転勤で初めての土地に来ると、多
少引っ込み思案のゆづきの母は、なかなか友達を作れず
に寂しそうにしていることが多い。子供が小さいころは、
子供を通じて学校や地域で友達を作ることもあるが、
越してきたばかりの頃は受験や何やらでバタバタしてい
たし、娘が高校生にもなれば、そういう機会もなく家に
こもりがちだ。

そこでゆづきは何か習い事でもしてみたら、と提案し
た。だが知らない土地ではどこに探しに行ったらいいか
も心もとない。そのことを彰介に相談したら、あっさり
応えてくれたのだ。

「おう、うちのおかんが梅田の教室に行つとるで。編み
物やつたかな。えらい楽しそうやし、そこ紹介したつた
らええわ」

そんなわけで、ゆづきの母と彰介の母はすぐに親しく
なった。章介の母は賑やかでムードメーカー的存在、ゆ

づきの母は一件大人しそだが内弁慶。その上、二人とも酒に強かった。いずれの父親もあまり飲まないのに、妻である自分たちは酒好きという、あまり大きな声では言えない悩みを共有したものだから、そりやもう俄然気が合ってしまった。

これにはゆづきも彰介も大笑いだつた。普段家で母親のぼやきを聞いているだけに、いやあ仲間がおつてよかつたよかつた、と思つたわけだ。

ゆづきも彰介の家に遊びに行つたこともあつて、彰介の母とはすぐに仲良くなつた。彰介母は、ゆづきも酒豪になるであろうことまで見抜いていて、やがて晩酌のお供までおおせつかるようになった。大学三年の時にゆづきの父の転勤が決まり、ゆづきが一人で大阪に残ることになつたとき、ゆづきの母はくれぐれも娘を頼むと彰介母に頼み込んだのだつた。

「また飲まされるなあ」

「しゃあないやん、それが楽しみで呼ぶよつなもんや」

「あなたの兄ちゃんも飲まへんもんなあ。また三人で居間のコタツで夜明かし・・・てのは困るけど」

「ま、適度に覚悟しときや。いつやつたらええ？」

「・・・水曜、かなあ・・・水曜にしといて」

「わかつた」
駅に着いたら、魔法は解ける。手を離して、その手を振る。ばいばい、またね。ほな、水曜日に。

(つづく)

編集後記

春になった。定期ローテーションと称して、6人連れて行かれた。入って来たのは、実質1人だった。去年は、育休で二人抜けて一人退職した後、定期ローテで3人連れて行かれて、誰もこなかった。文句を言ったら、新人が1人来た。さあ、何人になったでしょう。小学生の算数の問題のようだぞ？

今年も、文句を言おうにも課長も部長も異動だった。

バカやろおおおお〜!!!!!!!!!!!!!!!!!!

（「おや、まあ。それはちとあんまりかも……。」）

リフレッシュ休暇で遊びに行きたいのiiiiiiii!

（「やっぱり、自分が遊びたいだけだな。」）

いいじゃないかああああ〜!!!!!!!!!!!!!!!!!!

（紅）

早くも台風が日本に上陸しました。台風通過の宮崎からです。転勤ではるかかなたに来てしまいました。ぬくいです。湿っぽい。海が近くて山が近くて、虫が多くて鳥がなつこいです。映画館、ないです。先日ははる

ばる県庁所在地まで映画を見に行ってきました。特急で1時間半かかります。1日仕事です。電車、単線です。1時間に1〜2本です。それにしてもTV番組が少ないぞ。月9のドラマが…アニメが…ご当地番組に食われておる。その上放送半年近くも遅れてるし……

ま、なにはともあれPDF版4号目、53号も無事発刊です。

（翼）

今年も梅雨のはしりみたいな天気が多くて、気持ちまで陰気になってしまいます。からっと晴れた日には何だか陽気になっちゃって、ほんとに単純なつくりのわたくし。

それにしてもジェイソン・ステイサムです。もうめちゃくちゃ好きです。もうすぐDVDがまた出ます。欲しくってたまりません。毎日観てぐふぐふ笑ってしまうと思いません。そんなささやかな幸せで日々を乗り切る……主婦37歳、これでいいのぉ〜

（猫）

EOF

